

地域の文化芸術資源を活用した多文化共生のまちづくりの実践と意義 —浜松国際交流協会の取り組みを例に—

鈴木 恵梨香

(公益財団法人浜松国際交流協会)

要約

近年、社会包摂やまちづくりに文化芸術を活用する取り組みが増えている。浜松市の行政施策では文化芸術分野と多文化共生分野の連携が意識されているが、市の政策意向を基に事業を行う公立文化施設と国際交流協会との関係が構築されていなかった。国際交流協会職員で事業コーディネーターとして勤務する筆者は、多文化共生のまちづくりに資する方法として文化芸術を活用する意義を見出し、継続的に関係を構築する実践を2018年から試みている。参加者らの言動から、文化芸術を通じた場では、多様な背景を持つ人の参加に繋がり、想像力と寛容性が身に付き、地域への愛着や新たな創造に繋がる可能性が示唆された。浜松において国際交流協会と公立文化施設との協働が実現した要因として、お互いの分野に関心があり地域資源を活かした新たな企画に取り組むコーディネーターが両者に存在していることが挙げられる。

キーワード： 浜松、国際交流協会、文化芸術、公立文化施設、まちづくり

1. はじめに（実践背景）

筆者は浜松国際交流協会の職員として、文化芸術を活用した多文化共生のまちづくりに取り組んでいる。多くの自治体では、多文化共生施策として、外国人への教育・生活支援を重点的に実施しているが、マジョリティに対する在住外国人との共生の理解促進につながる機会創出の取り組みは多くない。本稿では、文化芸術を活用した実践背景と経緯を振り返り、地域の文化芸術資源を多文化共生のまちづくりに活用する意義を考察する。

外国人集住都市として知られる浜松市は、楽器関連産業や輸送用機器産業、光技術・電子技術関連等の先端技術産業などが盛んで、グローバルに展開している企業の工場が多く立地する地域であり、国籍問わず海外での生活経験がある市民が多く居住している。南米系日系人を中心とする外国人市民が急増したのは1990年の入管法改正以降であり、当時約4,700人だった外国人市民は、2008年には33,000人を越えた。その後リーマンショックの影響で約20,000人に減少したが、2016年頃からは技能実習生が増加したことで全体としても微増

傾向にあり、2023 年 10 月 1 日現在では 28,000 人以上の外国人市民が居住している。在留資格別割合の特徴としては、2023 年 4 月 1 日時点で身分系の在留資格を持つ市民の割合が約 75%を占め、それに伴い、公立小中学校に在籍する外国人児童生徒数も増加し 2023 年 5 月 1 日現在、146 校中 123 校に約 1,900 人が在籍している。つまり、長期的に安定して家族で定住化している外国籍市民が多く、近年では、技能実習生や留学生など単身で来日する若者も増えつつあるという特徴がある。このような背景があり、浜松市や国際交流協会、NPO 団体等が外国人支援に取り組み、2001 年には第 1 回外国人集住都市会議を浜松市で開催、2017 年にはインターカルチュラル・シティ・ネットワークにアジアで初めて加盟するなど、多文化共生の先進自治体としても知られている。

しかし、浜松市が 2021 年度に実施した「浜松市における日本人市民及び外国人市民の意識実態調査」の報告書（浜松市国際課 2022）によると、「多文化共生」の認知度は 66.8%と比較的高いものの、近隣の外国人との付き合いが「ほとんどない」と「全くない」と回答した割合が合計 68.3%、近隣以外での付き合いが「ほとんどない」と回答した割合が 68.1%と高かった。また、外国人との付き合いのある人は「仕事や職場で」と回答した割合が 59.4%であった。つまり、外国人との付き合いが無い人が多く、あったとしても仕事など「公」の場面での付き合いに限定される人が多いということであり、実践を始めた 2019 年頃に感じていたことと一致している。

2019 年から始めた筆者の実践は、私的場面において在住外国人と対話や交流をする機会を通じて外国人に親しみを感じる人を増やすため、多文化共生に関するイベントや施設を訪れる機会の無い無関心層の参加者にアプローチする目的のものである。方法として、文化芸術分野との協働を試みることにした。理由としては 2013 年に創造的な文化芸術活動を行う交流拠点である浜松市鴨江アートセンターが開館、2014 年にはユネスコ創造都市ネットワークに加盟、そして 2018 年にはアーツカウンシルである「はままつアーツ&クリエイション」が設置され、市の施策の方向性として市民による創造的な文化活動が求められていたからである。浜松市は、自治体の総合計画「浜松市未来ビジョン」に、多文化共生政策と文化政策の連携が記載されている唯一の都市であり（関・朝倉・南田 2021）、下位計画である「浜松市文化振興ビジョン」の基本目標には、「異なる文化の存在を認識するとともに、多様な文化を認め、理解し、尊重しあうこと」と挙げられている。一方、「浜松市多文化共生都市ビジョン」の重点施策においては、「多様性を生かした文化の創造」が位置付けられ、「音楽分野の創造都市である浜松という特徴を生かした音楽事業とインターカルチュラル事業とのシナジー効果の発揮を通じた文化的多様性の交流促進を進めていきます」と記載されている。以上のように、市の施策レベルにおいて、文化芸術分野と多文化共生分野との繋がりが意識されていることがわかる（南田・鈴木 2023）。

しかし実情は、市の政策に基づいて施設を運営する団体の担当者同士の横の繋がりが希薄であった。地域の特徴である文化芸術と外国人の持つ多様性をまちづくりに活かすという視点がある浜松市において、多文化共生への理解者を増やすためには文化芸術分野との

協働が有効と考え、市の公立文化施設である鴨江アートセンターとの関係性を作ることとした。実践当初は、アートを通じた取り組み例を紹介する講演やワークショップを通じ、外国人との共生について考え意識変容に繋げる目的で単発イベントを実施した。しかしすぐに効果が表れる性質のものではないため、この目的を念頭に置きつつ、日常的に国際交流協会と公立文化施設との関係性を作ることや、分野横断の新たなイベントを創り出すまでのプロセスや関係性を継続することに価値を見出して、コーディネートの実践をすることとした。

本稿第2章では、国際交流協会からのアプローチで実現した鴨江アートセンターとのイベントの実施経緯と内容について述べ、第3章では鴨江アートセンターから浜松国際交流協会へのアプローチにより実現したアート鑑賞ツアーとその後について述べる。第4章では研究者らとの音楽活動グループ立ち上げとその後の地域での展開について、実践者の視点から述べる。第5章では、地域の文化芸術資源を活用した実践が地域にもたらした影響とその意義について述べる。

2. 国際交流協会からアートセンターへのアプローチ

2-1. 協働開始に向けて

2-1-1. 浜松国際交流協会とは

浜松国際交流協会（以下、^{ハイス}HICE）は1982年に任意団体として設立、1991年に財団法人化（2010年に公益財団法人に改組）した浜松市の外郭団体であり、市民レベルでの国際交流及び多文化共生の推進母体である。HICEは浜松市国際課からの委託事業として、浜松市多文化共生センター及び浜松市外国人学習支援センターを開設当初から運営している。主な委託事業としては、多言語相談・情報提供、地域日本語学習支援などの在住外国人支援を中心とした「多文化共生のまちづくり」のほか、地域共生、国際交流と国際理解の推進などの「グローバル人材育成」である。このほかにも、外国人の雇用サポートやメンタルヘルス相談事業なども浜松市の各所管課から委託を受けつつ、行政と市民・民間団体を繋ぐ中間支援組織として、施設運営やイベント・講座の企画運営を通じ市民のニーズを汲みながら多文化共生の地域づくりを行っている。

2-1-2. 浜松市鴨江アートセンターとは

浜松市鴨江アートセンターは、1928年に建築された歴史的建造物（浜松警察署庁舎）の魅力をもとに、創造都市・浜松の拠点的役割を担う公共文化施設として2013年に開館した。指定管理者である一般社団法人浜松創造都市協議会・東海ビル管理グループが、展示やイベント、ワークショップを企画・開催している。そのほか、貸館事業やアーティスト・イン・レジデンス事業を行い、文化芸術活動を楽しむ市民やアーティスト・クリエイターが利用している。

2-1-3. 協働に至った経緯

政策レベルでは、双方に協働可能性があったものの、実際の現場レベルでの施策としては接点もなく協働する機会が無いままであった。協働のきっかけは、HICE から鴨江アートセンターにイベント協力を依頼したことである。2018 年当時、オーストラリアにある大学に所属していた大学教員から HICE に、浜松での講演を希望する打診があったからだ。内容としては、メルボルンにあるイミグレーション・ミュージアムの職員とアーティストが行っている、アイデンティティと帰属意識を共有するためのストーリーテリングの取り組みを、外国人が多く住む浜松に彼女らと赴いて紹介したいとのことだった。単に取り組みを紹介する講演をするだけなら、HICE 単独での開催が可能であったが、以下の理由から鴨江アートセンターと協働でイベントを実施することとした。

1 点目は、政策的背景である。浜松市多文化共生都市ビジョンに掲げられている「多様性を生かしたまちづくり」に基づき、HICE では新規事業として「新たな文化創造事業」を設けていた。前述のとおり、浜松市では多文化共生分野と文化芸術分野の特徴を活かした取り組みを目指すとしていたが、実際の現場においては、担当者レベルでの横の繋がりが希薄であった。そのため、多文化共生分野と文化芸術分野の担当者同士が繋がる絶好の機会だと考え、協働を検討した。

2 点目に、当時の社会的背景が挙げられる。2019 年 4 月の入管法改正につながったように、外国人労働者受け入れ拡大の機運が高まっており、毎日のようにメディアで取り上げられることが増えていた。また、あるロータリークラブからも寄付金事業の協働依頼が重なり、市民や企業が、外国人労働者受け入れや多文化共生社会について関心を持っているタイミングであるという確証が持てたからである。

3 点目は、鴨江アートセンターが、浜松市の文化政策・創造都市政策に基づいて運営している施設だからである。地域のアートセンターとして、小規模ながら創意工夫に富んだイベントを年間通じて実施していたことから、外部からの持ち込み企画に対しても柔軟に対応できる体制があると予想したからである。

以上の理由から、HICE から鴨江アートセンターにイベント協働を打診した。なお担当職員である澤柳氏は、浜松市と同じく日系人が多く住む隣接した市の出身であり、学生時代からペルー出身の仲の良い友人がいたことや、大学時代にはスペイン語を専攻していたこともあり、在住外国人に対する偏見もなく、外国文化や多文化共生に理解があったのは大きい。初対面で突然の持ち込み企画の打診であったにも関わらずその場で協働の意志を表明してくれたため、イベントに向けて準備を始めることとなった。

2.2 文化芸術によるまちづくり 2019～

2-2-1. 「ゆれるアイデンティティ」開催

HICE から鴨江アートセンターに最初の相談をしてから約 1 年後の 2019 年 4 月、鴨江アートセンターを会場に「アートで多文化社会を考える～移民社会オーストラリアからゲスト

を迎えて～：ゆれるアイデンティティ」を開催した。狙った参加者層は、日本社会でエスニック視点ではマジョリティ側に属することが多い日本人および外国ルーツの若者であった。そのため澤柳氏と表現を練った結果、「自分はどこからきて、いったい何者なのか。思春期の時に、また、進学、就職、結婚等でふるさとを離れ暮らす経験などから、誰もが一度は感じたことがある、ゆれるアイデンティティ。アート、移民、暮らしなどの切り口からアーティストと一緒に考える2日間」として広報した。

1日目は、第1部に講演としてイミグレーション・ミュージアムの職員による取り組み紹介、難民ルーツを持つオーストラリア生まれのアーティストによるエスニック・マイノリティの若者たちとのアートを用いた活動を紹介した。また、海外の事例だけではなく、より身近に多文化社会を考えてもらう目的として、浜松に住む国際結婚夫婦にも登壇を依頼した。夫婦は、「浜松で外国にルーツを持つ人が暮らすこととは」をテーマに、外国にルーツを持つ配偶者と自身の子どもが感じている生きづらさや問題意識を語った。

第2部では2つのワークショップを実施した。1つ目、難民ルーツのアーティストによるワークショップは、主に外国にルーツを持つ若者を対象とした。アーティストとの会話を通し、家族や歴史、文化など自分自身のことを言葉にして紙に書き出し語ることで、多様なバックグラウンドを持つ自身の立場を再確認するものであった。2つ目は国際結婚夫婦の日本人側によるワークショップを実施した。これは初対面の参加者同士がルールを決めてオリジナルカードゲームを作成し、ゲーム作りを通じて今の社会を見つめてみるという目的であった。

それぞれのワークショップ後には、HICEの活動から生まれた、外国にルーツを持つ定住者系若者グループ「COLORS」のメンバーが交流会「Let's PARTY!外国ルーツの若者たちのあつまりの場」を企画し、飲み物やお菓子をつまみながらゆるく歓談する時間を設けた。

2日目は、「マイルーツマップをつくろう」という街歩きワークショップを行った。内容は、①グループに分かれ、自分の思い入れのある街の風景（景色、場所、人、出来事、音など）をそれぞれ紹介しあう、②街中へ出て、グループのマイルーツになる風景をか探し写真に撮る、③マイルーツのスポットに立てる標識を、色ペンや色紙^{いろがみ}を使って作る、④グループごとに撮影した写真と、作った標識をエピソードとともに全参加者や共催者であるロータリークラブ会員の前で発表する、というものであった。



2-2-2. 参加者からの気づき

1 日目の第 1 部の参加者は定員の 70 名を超えた。申し込み情報やアンケートによると、以前から鴨江アートセンターを利用している市民はもちろん、初めて鴨江アートセンターを訪れた HICE 利用者もあり、双方のセンターの利用者が入り交じっていた。また、浜松市周辺に住む外国にルーツを持つ中高生や大学教員のほか、東京の美術館職員、アートマネジメント系の大学教員なども訪れ、今までの HICE 事業では広報が行き届かなかった人にまで参加者層が広がった。鴨江アートセンターと協働したことで、新たな参加者層だけではなく、広報チラシのデザインや開催会場に至るまで、今までの HICE には無かったものが出来上がった。

第 2 部のアイデンティティについて考えるワークショップでは、悩みを抱えていたと思われる日系人の中学生が発表中に涙する姿も見られたが、側にいた友人だけではなく初対面の参加者も温かく見守る雰囲気包まれていた。もう一方の新しいカードゲームを作るワークショップでは、和気あいあいとした雰囲気ながらも、全員が納得する決め方で話し合いが進み盛り上がっていた。

最後に COLORS が企画した交流会では、外国ルーツの有無を問わず若者が多く参加しており、予定の時間を過ぎてもしばらく帰る気配がなく会話が弾んでいた。会場となった部屋は、小学校の図工室を思い出させる木製の机があり、どこか自由にリラックスできる雰囲気であったことも影響したと考えられる。ただ、それ以外の理由を確認するため、想定していた外国ルーツの若者ではない、日本人の大学生 2 人に最後まで残った理由についてその場で聞き取りを行った。一人は「大学進学で浜松を離れたが、面白そうなことができそうなので戻りたい」と浜松に U ターンする選択肢が生まれたようだった。もう 1 人は、「大学進学のため岐阜から浜松に来たばかり。誰かと話したくて参加した。浜松で就職を考えたい」と数年後の定住先について考えるきっかけとなった旨の返答が得られた。

前者の大学生は、異分野連携によって生まれる創造性や、アートをテーマとしたイベントによる「わくわく感」が彼の浜松出身者としてのシビックプライドを刺激したことが推察される。他方、後者の大学生は、エスニック視点ではマジョリティ側の日本人ではあるが、浜松では「外から来た単身者」であるが故に、在住外国人と同様にマイノリティ性があり、地域に知り合いが少ないことによる孤独を抱えていた。マイノリティも受け入れてもらいやすい居心地の良い居場所があることで人と繋がり地域への愛着を生み、この地域への定住要因となる可能性を秘めていたことがうかがえる。

浜松はグローバル企業が多いこともあり、いわゆる通勤族や大学進学で引っ越してくる人も多いことから、「ゆれるアイデンティティ」の表現で参加者を募集した。特に引っ越しを伴う人生の節目には、自分がこの土地でどのように何者として生きるか、まさにアイデンティティが「ゆれる」タイミングである。本イベントは 4 月の第 3 週目の土日という、新生活にも慣れ始め、ゴールデンウィークでもない絶好のタイミングで開催したこともあり、彼らのような属性の人々の参加があったと考えられる。創造性と寛容性を高めるアート活動

は、多様な人が共に暮らす多文化共生のまちづくりだけではなく、人口流出に悩む地方都市にとっても取り組む意義があるのではないかと感じた出来事であった。

2-2-3. アートワークショップ「くじドロ」

本イベントに合わせて、浜松市在住の美術家である乾久子氏が発案し全国各地で行っている「くじびきドローイング」（以下、くじドロ）を終日実施した。くじドロとは、ことばと絵のリレーで社会とアートを柔らかくつなぐお絵かきのワークショップである（乾 2021）。ルールは次の通りである。まずくじを引き、くじに書かれた言葉（お題）に沿って絵を描く。次にお題を作り、くじ箱に入れ、他の誰かがそのくじを引いて絵を描く。お題の例としては、「ダイエット中の赤ペン」、「間違えてお正月に来てしまったサンタクロース」などユニークな言葉が並ぶ。ルールとしては非常にシンプルだが、想像力と創造力が試される。

くじドロに魅力を感じ、HICE では同年 12 月から 2020 年 2 月にかけて「多言語くじドロキャラバン」として日本語教室等を数カ所巡った。また外国語で書かれたくじは、2020 年 2 月に開催した HICE 主催の国際交流イベント「はままつグローバルフェア」のくじドロコーナーのくじ箱に入れたところ、子どもから大人まで、人種も属性も多様な人が行き交う場となっていたため、参加者の様子を観察することとした。自分がくじに書き残した言葉がどのような絵になったか気になり作品展示コーナーに戻ってきて絵を探す人、外国語で書かれたくじの意味が分からず外国人ボランティアスタッフに聞きに行く人、スマホの翻訳アプリで意味を調べる人、あえて調べず想像で描く人、くじを開いた瞬間に困った顔をして笑う人など多様な光景が見てとれた。

くじドロは一見、ほのぼのとしたお絵描きゲームに見える。しかしながら、知らない誰かが書いた言葉を、受け取った二人目が想像力を働かせ知識経験を基に描き、そしてまた知らない三人目に向けて言葉を残すという一連の流れは、未知なものに出会ったときにどう対応するかが試される。グローバルフェアでのくじドロ参加者の様子を見て、「このくじを残した近くにいないのに見えない誰か」を地域に当てはめると、「浜松に住んでいるのに話したことがない外国人」の姿と重なった。ゲーム感覚で異文化に出会い、受け入れ、想像力を働かせることで他人を想う疑似体験ができるくじドロは、身近な在住外国人について考える、多文化共生社会を考える最初の一步として有効な手段であると感じるワークショップであった。

3. アートセンターから国際交流協会へのアプローチ

3-1. ダンスワークショップ

コロナ禍により対面交流イベントが中止に追い込まれる時期が続いたが、2021 年度になってから鴨江アートセンターの担当者（元留学生）から HICE に企画の相談があった。それは「静岡県舞台芸術センター（SPAC）との共同事業として、演劇的視点で身体表現やダンスのワークショップを主催するが、招聘するアーティストとの会議で多文化共生を意識した

内容にするというアイデアが出たので、浜松に住む外国人に参加してもらうにはどのような方法があるか、協力してほしい」というものだった。馴染みのない公立文化施設で行われる有料の公募制ダンスワークショップに外国人が自ら参加するのは困難であると伝えつつ参加者募集の協力をしたが、外国人の参加者は担当者の知人のみであったという。

結果的にうまくいかなかったが、近年は、文化芸術分野において社会包摂を目的に演劇手法を活用したワークショッププログラムの取り組み等が全国でも行われており、外国人との多文化共生を意識した取り組みが増えてきたことを実感する出来事であった。

3-2. 文化芸術によるまちづくり 2022～

3-2-1. HICE Korekara Buddy との連携によるアート鑑賞ツアー

2022年4月に入り、「ゆれるアイデンティティ」を担当した鴨江アートセンター職員からHICEに相談があった。それは「40人のアーティストの作品が一堂に会する展覧会を実施する。これを機に浜松在住外国人にも来館機会を作りたいため、外国人も気軽に参加しやすいようなアート鑑賞ツアーを実施したい。初めて企画するのでどのような方法なら外国人が来てくれそうか、相談にのってほしい」とのことであった。希望を聞き取ると、アート作品の説明を通訳者の説明だけに頼るのではなく、英語かやさしい日本語でアート作品の感想を自由に言い合える対等な関係性が築けるしかけが理想ということが分かった。そこで筆者はHICEとJICA浜松デスクが協働で立ち上げた「HICE Korekara Buddy」（以下、バディ）との連携を勧めた。

「バディ」とは、公益社団法人 트레이ディングケア（愛知県高浜市）の「バディシステム」を参考に「浜松版バディ」として2022年3月に活動し始めたばかりの集まりである。活動内容は、国籍問わず一緒に地域の行事やイベントに参加したり、共通の趣味としてスポーツを楽しむ知人・友人を作ったりすることである。そのため企画メンバーには、技能実習生、仕事で留学生支援をしている若者などに参加を呼び掛けた。偶然にも相談があった次の日にバディの企画会議が開かれることになっていたため、鴨江アートセンター担当者を会議に招き、企画趣旨を説明する機会を設けた。こうしてHICE Korekara Buddyと鴨江アートセンター連携による「英語とやさしいにほんごで観る アート鑑賞ツアー」の実施に至った。

主な参加対象者は、留学生や技能実習生、ALTなど、単身で来日している浜松滞在歴の浅い若者とした。理由としては、浜松市の外国籍住民の約75%を占める「永住者」や「定住者」などの在留資格を持って家族で長期間に渡り暮らしている者とは異なり、彼らは土地勘も無く、学校と職場以外に知り合いがおらず孤立しがちな層だと考えたからである。また、日本人であっても「ゆれるアイデンティティ」で出会った「外から来た単身者」の存在も記憶に残っており、浜松に引っ越してきて間もない人にも需要があると考え、心当たりのある人に直接声をかけた。

実施に向けて、鴨江アートセンターはホームページ等で英語と日本語で広報し、HICEはメールやSNSで参加者を募集したところ、当日参加含め約40名が参加し満員となった。約

半数が外国人市民であったが、バディ企画として位置づけ参加する仲間の存在があったことで、公立文化施設へのアクセスに対する心理的なハードルが下がり、参加者が大幅に増えたと考えられる。

鑑賞ツアー当日は、鴨江アートセンター担当職員がアート作品について、やさしい日本語で説明して進行した。鑑賞ツアーの最中、国籍や年代に関係なく、近くにいる者同士で作品の感想を伝え合い、終始和やかな雰囲気であった。



3-2-2. 企画運営メンバーからの気づき

鑑賞ツアーの最中は、CIR（国際交流員）や60～70才代のHICEボランティアが適宜英語で補足説明する場面も見られた。このボランティアの多くは、海外駐在・帯同経験があり、長年HICEで外国語を活かして情報提供ボランティアの活動をしていた人たちである。コロナ禍に入ってから、HICEが運営するセンターの受付カウンターにおけるボランティア活動を停止していたうえ、HICEの自主事業、特に国際交流に関するイベントや講座の廃止およびオンライン化により、彼らにとっては久々に対面で語学を活かせるボランティア活動であった。その意味でも、鴨江アートセンターが企画した、外国語での交流を伴う鑑賞ツアーの意義があったと言える。

また、鑑賞ツアーで参加対象としていた浜松滞在歴の浅い若者を、それより前の企画段階から活動に巻き込んでいた。1人目は、2022年3月上旬の休日にHICEを訪れた日本人の若者である。ボランティア登録を希望していたため登録動機を尋ねたところ、彼女は「ホームページで探して見つけた。転職して浜松に引っ越してきたばかりで前職では海外出身者を受け入れる仕事をしていたので、なにかできるボランティアは無いか」ということだった。彼女は浜松に縁もゆかりも無く、知り合いも居ない地方都市に住み始めたばかりの若者と分かり、「ゆるるアイデンティティ」で出会った日本人の若者の存在を思い出したため、当時立ち上がったばかりのバディの企画会議に誘うこととした。数回参加後に鑑賞ツアーの

企画が持ち込まれた際、彼女が偶然にもアートが好きとのことだったため、企画担当者として活動を始めることとなった。

2 人目は、5 月に HICE カウンター窓口を訪れた ALT として働く女性である。同じくボランティア登録を希望していたため話を伺ったところ、以前は ALT として働いており国際交流イベント等にも参加していたが、2020 年から同じく ALT として浜松に引っ越してきたとのことだった。彼女は「コロナ禍で 2 年間、職場と家の往復をする日々で知り合いも少ない、英語のできる国際交流ボランティアをしたい」と、少し元気が無い様子で語っていた。そこで同じくバディの企画会議に誘い、色々なイベントの企画側として加わることになった。

3-2-3. 多文化共生のつながり

以上のように、参加側にも企画側にも「外から来た若い単身者」の存在があった。地域での孤立を避けるために支援すべき存在でもあるが、一方で、彼ら彼女らはプライベートの時間で居場所を求めるだけでなく、自分の経験を活かせる活動を求めている。その意味で、このアート鑑賞ツアーは、参加者（ゲスト）として、気軽に国際交流したい人、企画側（ホスト）として自分の得意なことを活かしながら交流したい人双方の希望を叶えることができた機会となった。

この鑑賞ツアーでは、終了後も会場に残り、コロナ禍における久々の対面イベントの楽しさを噛み締めるように、日本語や英語、韓国語で歓談する様子が見られ、若者同士は LINE など SNS で繋がってそのまま食事に出掛けて行った人たちもいた。仕事で浜松に単身移住してきたばかりの日本人参加者に、その後の参加者との関係性を数ヵ月後に聞いたところ、「知り合いがあまり居ない浜松であったが、バディに参加したことでインド人技能実習生と出会い、その後も SNS で繋がっている。大型台風が来た際には、お互いに『大丈夫?』と安否を確認しあった」との報告を受けた。この活動では、アート作品を通じた対話や交流をきっかけに、「参加者」から「知り合い」へ、さらに「友人」へと変化する光景が見られた。ましてや数ヵ月後にも関係が続いて災害時にお互いに安否を気遣える存在ができる関係性になるところまでは想定していなかったため、驚きと嬉しさを感じたエピソードであった。文化芸術を通じた取り組みについて、多文化共生政策の研究者である池上は、外国人が職場以外に接点を持たないまま長期滞在するのは、かれらにとって大きなストレスであり、地域社会にとっても不安要因となると指摘しており、さらに、文化芸術活動は単身の外国人労働者と地域をつなぐ上で大きな潜在力を秘めていると述べている（池上 2020）。

また、地域への愛着が芽生えるきっかけに繋がる要素もあった例を 1 つ紹介したい。浜松市では毎年ゴールデンウィークの 3 日間、「浜松まつり」という大規模イベントが行われる。これは、170 以上の町（いわゆる町内会）が参加する「凧揚げ合戦」と、市中心部で 80 台以上の「御殿屋台の引き回し」をする祭りである。バディ企画で凧揚げ合戦と一緒に見に行く参加者を募集していたため、浜松に家族で引っ越してきたばかりの方に情報を提供した。

立ち話及びメールで感想を聞き取ったところ次のような返信があった。「浜松祭りは、移住後早々、地域への愛着を高めるイベントでした。実際、以前住んでいた首都圏の地域ではこうした催しはなく、またあったとしても自分から進んで参加しようとも思っていないでした。凧あげ大会では、それぞれの町の凧のバリエーションを見比べるのも楽しかったですし、その中から自分たちの住む町の凧を見つけたときは家族で盛り上がりました。また、その町の関係者のテントを通りかかったときは、こちらから話しかけに行って、法被姿の男性と置かれた凧と一緒に写真を撮らせてもらいました。小学2年生になる上の子どもは、以来、たまにラップのリズムを口ずさんでいます」。このように在住外国人や移住者などマイノリティ性を持つ人にとって、その地域のマイノリティである人が他にも参加すると想定され、加えて引率・同行者の存在や多言語対応など参加のハードルが低くなる工夫がされている集まりがあると、安心感から参加に至り、さらに地域の文化芸術資源を活用することで、地域への興味関心や愛着が芽生えるきっかけにもなる可能性が感じられた。

4. 音楽教育、アートマネジメント研究者から国際交流協会へのアプローチ

2019年から2022年にかけて、単発事業をきっかけに鴨江アートセンターとHICE担当者間で日常的に連絡を取り合える関係性を構築した。本稿を執筆している現在も、アーティスト・イン・レジデンス事業に参加しているアーティストとのコラボ企画の構想が生まれており、今後もアートを通じた多文化共生に繋がる場を継続的に実施できる体制となっている。

その一方で、2022年からは浜松の特徴である音楽を通じた実践を始めた。これは公立文化施設関係者ではなく、大学教員らとの取り組みである。この章ではこのプロジェクトを始めた経緯とその後について述べる。

4-1「多文化×音楽」事業

4-1-1. ハマルおんがくプロジェクト発足

本プロジェクトは、浜松市において、音楽を通じて外国ルーツの子どもの居場所づくりや多文化共生に資する活動をするための研究者および団体職員らで作られたグループであり、2022年5月から始動した。プロジェクト名の「ハマル」は、「ハママツ」と「マルチカルチュラル・ミュージック・エデュケーション (Multicultural Music Education)」を略して「ハマル」としている。音楽に「ハマル」という意味も込められている。

発足に至ったきっかけは2021年にさかのぼる。2021年10月にHICE内に配置されているJICA浜松デスクに「外国人材・共生」のポジションとして着任したA氏から、音楽を通して外国ルーツの子どもたちの居場所づくりや自己実現の支援に取り組みたいと申し出があったことである。同年12月には、HICE事務所からほど近い公立大学法人静岡文化芸術大学に後に着任することになるB氏が、外国人の定住・高齢化に焦点を当てた音楽活動を通じた文化的コモンズの形成に関する調査の一環でHICEにヒアリングに訪れた。さらに2022年3月には、浜松市内の元私立中高教員で現在は岐阜聖徳学園大学で教員をしているC氏から、

外国人児童のための日本語習得支援を加味した多言語音楽教材の開発の調査の一環で HICE に問い合わせがあった。元々筆者も、修士課程では音楽を通じた多文化共生教育について、文化政策やアートマネジメントの視点から研究しており、HICE 入職後も取り組む機会をうかがっていた。つまりほぼ同時期に浜松で音楽を通じて多文化共生に繋がる取り組みを行いたい研究者や実践者が集まったのが発足に至った経緯である。

そこで2022年5月に一同に会する機会を設け、それぞれが関係者に事前調査した結果や、外国人住民、特に子どもが置かれている社会構造などの問題意識や方向性を共有した。こうして、業務や科研費事業として実施可能な範囲で、アカデミックな専門性や人的資源、楽器など音楽資源を活かして活動を始めることになった。事業内容としては、①音楽を用いた多文化共生に関する研究および勉強会、②外国にルーツを持つ小学生を対象としたラララりずむクラブ、③B氏の所属する研究室でアートマネジメントを学ぶ学生が企画するイベント等に対する助言や広報協力、④C氏の研究である歌唱を通じ母語や母文化、日本語習得や日本文化への理解を深め自己肯定感を高める研究に対する助言や広報協力である。

本稿ではハマルおんがくプロジェクトとして初めて活動し始めた②のラララりずむクラブについて述べる。

4-1-2. 「ラララりずむクラブ」

本事業で対象としたのは、市内でも在住外国人（特に日系ブラジル人）が多く住む地区の小学校に通う外国にルーツを持つ児童である。この小学校は JR 浜松駅から約7kmの距離があり、保護者による送り迎えが必要となると参加できない児童が多くいると考え、会場は小学校の向かい側にある浜松市の協働センターを借り、アウトリーチ型とした。ここでは、学校とは違い日本人児童が居ない環境で伸び伸びと過ごせる居場所づくりを目指した。趣旨に賛同した静岡文化芸術大学の現役学生や修了生、音楽指導者などが加わって準備を始め、2022年8月に、毎週火曜日と木曜日の午後1時から4時まで計9回活動を行うこととなった。

参加者募集の段階では、「音楽」クラブを前面に出しつつも、音楽のみだと敷居が高く感じる児童がいる可能性があるため、「夏休みの宿題」も広報要素に入れ、参加者を募集した。

プロジェクト発足から実施まで3か月に満たなかったが、メンバーで役割分担したことで早期に実施することができた。例えば、学区内の団地の自治会関係者や、市教育委員会および当該小学校の外国人児童担当教員に趣旨を説明し児童募集の協力依頼をする者、音楽（楽器・歌唱）指導が出来る協力者を見つける者、楽器を調達する者、宿題支援が出来る学生を集める者、演劇手法を用いた子どもの居場所を研究し尚且つ身体を使ったアクティビティを実施できる者、同地区出身で、募集チラシをポルトガル語翻訳し保護者との連絡を担ったブラジルにルーツを持つ者など、それぞれが人脈や知識経験を生かす動きが形成されていた。結果、短い募集期間にも関わらず11名の外国にルーツを持つ子どもたちが集まった。前半はリズム遊びのほか、ハンドベルや木琴・鉄琴演奏を楽しむ時間、後半を宿題の時

間としたが、自由時間を多く確保することも大切にした。子どもたちは、鬼ごっこを始めた
り、トランペットやビオラ演奏に挑戦したり、外国にルーツを持つ男子高校生の楽器演奏姿
に興味を持つ子どもなど、それぞれ過ごしていた。

活動の様子が NHK ニュースで報道された後の活動日には、協働センターを定期的に利用
している高齢者から「ニュース見たよ、頑張ってるじゃん」と声を掛けられた。興味を持っ
てもらえたようで、その地区の住民が日常的に利用する公共施設を活動場所に選んだ意義
を感じた。また、社会福祉協議会職員の見学もあり、関心を持ってもらえる機会にもなっ
ていた。そのため、最終日におこなった子どもたちの練習成果を披露する発表会には、保護者
だけではなく協働センターの所長と職員も招待し、子どもたちが楽器演奏・歌唱する姿、司
会進行する姿を見せる機会を作った。

その後、夏休みの活動の成果もあり、近隣の自治会関係者のご厚意で、外国籍住民が多く
住む団地内の公民館を無料で借りられることになった。本プロジェクトメンバーが丁寧に
自治会関係者と関係性を作ったことで実現したともいえる。この活動は、外国ルーツの子
どもが安心して過ごせ、楽器演奏を通じて達成感を感じる居場所作りと同時に、彼らの姿を日
本社会に伝える機会としても意義があった。

4-2. 大学生が参加した意義

夏休みに全9回を運営する中で、静岡文化芸術大学の学生が、子どもに寄り添う存在とし
て大きな役割を果たした。その年の10月（後期）からは大学の正規科目である「地域連携
演習」に「ハマルおんがくプロジェクト」が追加され、単位として認定されることとなった。
こうして多文化共生や音楽に関心のある学生が授業として参加可能となった。2023年7月
には、学生から団地内の公民館を利用して外国ルーツの子どもたちを対象とした音楽によ
る居場所作り事業を企画したいと相談があり、10月から活動を開始している。その中心的
存在である学生は、芸術文化学科所属ではあるものの日本語教員養成課程を履修しており、
アートマネジメントの知見だけではなく、外国人の事情や背景にも理解がある点が心強い。
文化芸術作品の価値を提供するのではなく、外国ルーツの子どもが夢中になったり楽しい
と感じたり、潜在能力を引き出すための文化芸術ワークショップを企画、実施、振り返りを
行っている。本プロジェクトはこのような幅広い視点を持つ人材が育つ場としても機能し
つつあり、将来の地域を担う人材育成の点でも今後の動きに注目していきたい。

5. 文化芸術を活用した理由と実践継続の背景

5-1. 文化芸術を多文化共生のまちづくりに活用した理由

多文化共生の取り組みになぜ文化芸術を活用したのか、文化芸術を通じた取り組みには
どのような意義があるのか論拠を示したい。1点目として文化芸術そのものが持つ役割を
挙げる。例えば文化芸術基本法（2017）の前文にはこのように示されている。

文化芸術は、人々の創造性をはぐくみ、その表現力を高めるとともに、人々の心のつながりや相互に理解し尊重し合う土壌を提供し、多様性を受け入れることができる心豊かな社会を形成するものであり、世界の平和に寄与するものである。更に、文化芸術は、それ自体が固有の意義と価値を有するとともに、それぞれの国やそれぞれの時代における国民共通のよりどころとして重要な意味を持ち、国際化が進展する中であって、自己認識の基点となり、文化的な伝統を尊重する心を育てるものである。

つまり文化芸術は、単に教養・趣味・娯楽として楽しむ権利を保障することにとどまらないということである。文化芸術が持つ役割として、自分が何者であるか認識する機会が得られ（自己認識の基点）、他者の価値観やアイデンティティを理解し尊重することに繋がり（多様性の受け入れ）、閉塞感や違和感を覚えた際に新たな創造や革新を推進できる（創造性をはぐくむ）という点が、多文化社会づくりの基盤として活用する意義があると考えた。

2点目は、まちづくりの視点である。まちづくりや地域の再生といえば、その一つの方策として注目されているのが、文化による都市再生ないしは欧州に由来する「創造都市」という考え方である（飯笹 2007）。飯笹によると、イギリスの都市計画家チャールズ・ランドリーの創造都市論は、多様なマイノリティの存在をむしろ創造性の源泉として積極的に評価し、彼らをいかに社会に統合し彼らの活力をいかに社会に生かしていくのか、という政策的視点を重視している。その際に重要な役割を果たしているのが文化芸術の活力や創造力である（飯笹 2008）。さらに飯笹は、創造都市と外国人ないしは多文化の共生というテーマを考えるのにふさわしい都市の1つは、間違いなく浜松市であると述べている（飯笹 2008）。筆者は2011年から多文化共生や文化政策の研究をする過程で、創造都市についての知見を得ており、地域の多様性を活かした多文化共生のまちづくりは、まちの活性化にも繋がるという視点を持っていた。また、2012年に策定された「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」（通称：劇場法）の取組に関する指針が翌年3月に告示され、「6. 国際交流に関する事項」で「地域に居住する外国人」との取り組みを行うよう明記されたことを知った。さらに同月に策定された「浜松市多文化共生都市ビジョン」の重点施策には「多様性を生かしたまちづくり」が位置付けられ、実施計画には「多様性を生かした文化の創造」が示された。これらの施策の方向性として、文化芸術分野には地域の外国人を、多文化共生分野には文化芸術による取り組みを視野に入れていることが分かったため、それらを融合した実践をしたいと考えていた。浜松市には、はじめに述べた通り、文化芸術分野と多文化共生分野が連携する上で政策的な後ろ盾があったが、市の政策意向を基に施策・事業を行う公立文化施設とHICEとの協働関係は無かった。そのため2018年頃から、まずは浜松市鴨江アートセンターとの協働関係の構築を目標に掲げ、本稿で述べた通りの実践を行った。

5-2. 文化芸術を活用した実践の継続

文化芸術を活用した取り組みの契機となった浜松市鴨江アートセンターとの協働では、文化芸術に関わる専門的知見や人的資源の提供を受けた。アートワークショップなどの取り組みからは、アートや文化芸術活動の場は捉え方や考えに正解も間違いも無いという安心感が多様性の担保に繋がり、対話を通じ新たなアイデアや動きが生まれるなど創造的な取り組みに発展し、それが地域課題を解決するきっかけや動きに繋がるという実感も得た。また、「ハマルおんがくプロジェクト」を通じた大学との連携では、将来を担う大学生の実践の場にも繋がった。文化芸術を活用した取り組みが、どのように人の意識変容や地域の発展に貢献したのか数字として効果を表すことはなかなか難しいが、実践の中で関わった人達の満足度は高いものであったと考えている。

本稿を執筆している現在も、多文化共生分野と文化芸術分野の新たな繋がりを作っている最中である。2023年9月には、インターカルチュラル・シティ浜松シンポジウム2023として、アートマネジメント研究者らを登壇者として迎え「多文化共生の先進地、浜松で考える アートを活かしたゆる〜いまちづくり-きく・つなぐ・ひらく-」を開催し、市内外から約60名の申し込みがあった。浜松市やHICE主催イベントによく訪れるいわゆる常連参加者は少なかった一方で、今まで繋がりがなかった領域の関係者が多く新鮮な顔ぶれだったことが印象深い。シンポジウムの最後には、文化芸術活動を行っている市民や芸術系教員、医療関係者、大学生、大学教員、公立文化施設職員ら参加者と、筆者を含む登壇者5名がグループに分かれざっくばらんに情報交換、交流する機会を設けた。後日、それぞれのグループで新たな繋がりができており、それを機にSNSで繋がっているのも確認でき、開催した意義があったと感じた。筆者にも公立文化施設職員から新たな協働希望のアプローチがあった。実はその公立文化施設とは、現在HICE事務所が入居している施設である。つまり今まですぐ近くにいたにも関わらず、事業担当者同士が深く繋がるきっかけが無かったのである。すぐに対話の機会を設け、双方の浜松に対する想いや課題の共有をしたことで、鴨江アートセンターも交えて新たな協働関係を築くことに繋がり、動き出している。

5-3. HICE と鴨江アートセンターの協働が実現した背景

本稿を執筆するにあたり、HICE が文化芸術を活用した取り組みを行う契機となった鴨江アートセンターの澤柳氏に、HICE との協働を決断した理由を改めて聞き取った。

HICE からの打診当時、鴨江アートセンターの年度計画内に多文化共生をテーマとした事業は含まれていなかった。澤柳氏は個人的に幼少期から多文化共生とアートに関心があり、またHICEの功績を知っていたが、今まで業務としては自身の関心事である多文化共生とアートを掛け合わせた取り組みを事業化することはなかったという。ではなぜ事業化に至ったのか。理由の1点目は、「HICE（筆者）が開催資金を含め企画を持ち込んでくれたから」であった。2点目は、「地域資源を活かしてアートに取り組む当館の姿勢にもマッチしたため、またとない機会であり、ぜひ一緒にやらせてもらいたいと思った」からであった。澤柳

氏は一方で、「個人的に多文化共生とアートに関心があるとはいえ、当時の私はリサーチ不足であり、実施手法は実験的であった」という。初の協働イベント「ゆれるアイデンティティ」開催後の感想として、「当館のような小規模施設でも外部資金やHICEのような専門性の高い機関との協働により、多文化共生とアート分野の接触を浜松でも作り出すことができる経験をさせていただいた。HICEのおかげだ。開催後、さらにリサーチを重ねて小さくても続けていくことができたらしめを新たにした。」と述べている。

このように浜松の文化拠点であるアートセンターには、多文化共生に理解があり多文化を地域の可能性と捉えてコーディネートを担当する職員が常駐していることが分かった。HICE職員である筆者も、多文化共生と文化芸術分野を掛け合わせることに興味と、地域資源を活用したいという考えがあり、澤柳氏と同様に異分野を繋ぎ新しい企画を行うコーディネーターであることが、協働が実現した理由の一つであると考えている。

6. おわりに

筆者は国際交流協会に入職して以来、多文化共生への理解を促す啓発事業や国際交流・理解イベントなどを担当している。多言語生活相談や日本語学習支援に直接関わる機会が無い立場の職員が、どのように多文化共生のまちづくりに貢献できるか暗中模索していた。転機になったのは浜松市鴨江アートセンターとの「ゆれるアイデンティティ」の企画である。およそ1年かけて文化芸術を通じた事業を企画したが、これを可能にしたのは、文化芸術を通じた新たな取り組みの事業枠を設けて予算や人員を割いてくれた組織と、挑戦を応援してくれる寛容な上司の存在によるものである。安心して創造的な取り組みを行える恵まれた組織環境の下で、在住外国人を始めとする多様な人々が暮らしやすい浜松を目指し、今後も地域の文化芸術資源を活用した多文化共生のまちづくりの仕掛けを継続していきたい。

〔文献〕

- 飯笹佐代子, 2007, 「多文化都市政策と地域再生 - 外国人との共生と文化的多様性・創造性 - 」
佐々木雅幸+総合研究開発機構『創造都市への展望 - 都市の文化政策とまちづくり』学芸出版社, pp. 124-148.
- 飯笹佐代子, 2008, 「創造都市を標榜する浜松の課題 - 文化都市政策の観点から」『価値を創る都市へ - 文化戦略と創造都市』NTT出版, pp. 244-257.
- 池上重弘, 2020, 「文化芸術活動を通じた多文化共生の取り組み」松本茂章編著『文化で地域をデザインする - 社会の課題と文化をつなぐ現場から - 』学芸出版社, pp. 92-106.
- 浜松市企画調整部国際課, 2023, 『2023年度（令和5年度）国際課業務概要』
- 浜松市教育委員会, 2023, 『外国人子供教育支援推進事業 説明資料』
- 浜松市市民部創造都市・文化振興課, 2020, 『浜松市文化振興ビジョン』
- 文化庁, 2017, 『文化芸術基本法』

南田明美・鈴木恵梨香, 2023, 「浜松市におけるアートを通した多文化共生の試み: 浜松国際交流協会を中心にして」『静岡文化芸術大学研究紀要』 23, pp. 81-94.

関鎮京・朝倉由希・南田明美, 2021, 「日本における在留外国人を対象とした文化政策の現状と課題」『北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編』 72 (1) pp. 95-110.

[参照 URL]

くじびきドローイングのすべて <http://kujidoro.net/about> (最終閲覧 2023. 12. 1)

浜松市鴨江アートセンター <https://kamoeartcenter.org/> (最終閲覧 2023. 12. 1)

浜松市鴨江アートセンター「ゆれるアイデンティティ【アートで多文化社会を考える～移民社会オーストラリアからゲストを迎えて～】」

https://kamoeartcenter.org/events/yureru_identity/ (最終閲覧 2023. 12. 1)

Creative City Hamamatsu 創造都市・浜松 <https://www.creative-hamamatsu.jp/> (最終閲覧 2023. 12. 1)

浜松まつり公式ウェブサイト <https://hamamatsu-daisuki.net/matsuri/> (最終閲覧 2023. 12. 1)

創造都市ネットワーク日本 (CCNJ) <https://ccn-j.net/creative-city/> (最終閲覧 2023. 12. 1)